

パーリ仏教における光明遍 (āloka-kasīṇa) 業処について

Aramrattana Sūtas

1. はじめに

南方上座仏教には業処説⁽¹⁾がある。四十業処説⁽²⁾の初出は注釈書時代の *Visuddhimagga* (清浄道論) であり、その中に十遍 (dasa-kasīṇa) がある。十遍の第九の項目には光明遍がある。本稿では光明遍の展開について述べる。

2. 光明遍の概要

光明遍とは光または光明を対象として、それに集中し心を統一する修行法である。

壁の孔や葉の茂る樹などの間からの日光又は月光が漏れて地上に円形の生起した自然の遍と、灯光などを利用して壁に光明の円形を作った人為の遍とが光明遍⁽³⁾の対象である。

この遍を光明の曼陀羅 (円相) として、「obhāso(光), obhāso」又は「āloko (光明), āloko」と念じて修習すると自由にその影像が心の中に現れてくる。これを取相 (uggaha-nimitta) が生じたという。その後は自己に適した場に入って修習する。取相を思い浮かべて、次第に諸蓋⁽⁴⁾は鎮伏し、諸煩惱は止息して、近行定 (upacāra-samādhi) の状態となると初めて似相 (paṭibhāga-nimitta) が生起する。似相は厚い淨らかな光明の集りのようである。

似相を保ち続けることに精進すれば、ついに安止定 (appanā-samādhi) が得られて、初禅の状態になり、五自在⁽⁵⁾ (pañcavasī) の修習を熟練して、第二禅、第三禅、四禅説の第四禅 (又は五禅説の第五禅) が得られる。

3. 光明遍の歴史的経緯（六時代区分⁽⁶⁾）

Vis. の十遍には「光明遍」が含まれているが、パーリ聖典の最初期の段階にはこれが含まれていなかった。これが含まれたのには次のような経緯がある（図Aに参照）。

- ① Nikāya 時代：地・水・火・風・青・黄・赤・白・空・識の十遍として見出されている⁽⁷⁾が、光明遍と言う語は見出されない。

遍の修行は地・水などを対象とし、遍を上、下、横、全体に、無量に想念する。

- ② 経と論との中間時代：Nikāya 時代と同様な十遍⁽⁸⁾がある。一方 Paṭisambhidāmagga（無礙解道）中に十遍から空と識が除かれた八定（attha samādhi）として見出されている⁽⁹⁾。同一經典中に十遍と八定が見出されている。

- ③ 阿毘達磨（Abhidhamma）時代：Dhammasaṅgaṇī（法集論）中に初めて色の修行法の八遍（aṭṭha-kasīṇa）と言う語が見出される⁽¹⁰⁾。その内容は Pts. の八定と同様である。また Kathāvatthu（論事）において、地・水・火・風・青・黄・赤・白がまとめてあげられている⁽¹¹⁾が、八遍と八定の語は見出されない。Kv. も Dhs. と同様に色定の入定者に関わる文書である。

- ④ 論と注釈書との中間時代：蔵外三書の Nettipakaraṇa（導論）においては Nikāya 時代と同様な十遍がある⁽¹²⁾。八遍は止（samatha）であり、空と識は観（vipassanā）であると説明されている。

- ⑤ 注釈書時代：周知のように Vis. の元である Vimuttimaggā（解脱道論）に三十八行処⁽¹³⁾がある。

1) Vim.⁽¹⁴⁾ 卷第三において Nikāya 時代には dasa kasīṇa が十遍と訳されているが漢文の Vim. には十一切入とある。十一切入の項目は Nikāya 時代の十遍と同様である。

2) Vim.⁽¹⁵⁾ 卷第五において十一切入は色一切入と無色一切入に区分された。無色一切入には空一切入と識一切入がある。空一切入は空処であ

り、識一切入は識処である⁽¹⁶⁾と説かれている⁽¹⁷⁾。

又、Vim. の三十八行処⁽¹⁸⁾にはない光明一切入が挿入され、初めて光明一切入が説かれている。また空一切入が「虚空の色を離れるもの」と「虚空の色を離れざるもの」の二種に分けられている。地・水・火・風・青・黄・赤・白・光明・「虚空の色を離れざるもの」空・「虚空の色を離れるもの」空・識一切入である。合計すると十二一切入になる。

3) Vis. の十遍は以前の時代の空遍・識遍が光明遍・限定虚空遍に換わり、初めて十遍が地・水・火・風・青・黄・赤・白・光明・限定虚空遍になった。

4) Vis. 以外の注釈書は Nikāya 時代と同様な十遍の項目が見出されているが、Vis. のように十遍の項目は見出されない。但し、光明遍と言う語は単独で多数見出される。

⑥綱要書及び復注釈時代：十遍の全てが Vis. と同様であるが、Abhidhammattha-saṅgaha⁽¹⁹⁾ (撰阿毘達磨義論) では限定虚空遍が先になり、光明遍が後になり、順序が入れ替わっている。

4. 光明の修行法の展開

「3. 光明遍の歴史的経緯」で光明遍が注釈書時代に挿入されたことが分かった。光明遍の初出がこの時代の Vim. である。Vim. の著者 (Upatissa) が光明遍を著者の独自の修行法として著わせば、Vis. が光明遍を転借して、新たに十遍を構造する必要がないし、また、アバヤギリ派に対立するマハーヴィハーラ派が認めるはずがないと考えられる。いずれにしても、それ以前には十遍に含まれていなかった「光明遍」が、なぜ注釈書時代に至って編入されたのであろうか。ここではこれを探ってみたい。

光明に関わる修行法として光明想 (āloka-saññā) と光明遍満 (āloka-pharaṇatā) が見出される。

光明想に関しては、Nikāya 時代から見出される。光明想を修習すれば智見 (ñāṇadassana) が獲得できると以下のように説かれている。

Puna ca param bhante ālokasaññaṃ manasikaroti, divāsaññaṃ adhiṭṭhāti: yathā divā tathā rattiṃ, yathā rattiṃ tathā divā. Iti vivaṭena cetasā apariyonaddhena sappabhāsaṃ cittam bhāveti. Idam bhante anussatiṭṭhānaṃ evaṃ bhāvitaṃ evaṃ bahulīkataṃ ñāṇadassanapaṭilābhāya saṃvattati⁽²⁰⁾

又さらに尊師よ。光明想を作意し、日想を執持し、「昼は夜と同じ、夜は昼と同じ」かく纏蓋無き開いた心によって、心に光輝をさせる。尊師よ、この随念の状態はこのように修し、このように多修した者は智見の獲得に導く。

但し、経論時代の Pts. には「光明想の力による心の一境性が無散乱にして、寂止力である」が加えられている⁽²¹⁾。さらに、「光明想を修習すると清浄心を得て、天眼によって、有情の死生智が獲得できる」⁽²²⁾とあるように光明想から獲得できるの智見が天眼に変わる。その後の論と論と注釈書の中間時代は光明遍の修行法が見出されない。

上記の注釈書以前の時代の修行法と「2. 光明の概要」からの注釈書時代の修行法を比較すれば、「日想を執持し」とは取相の修行の段階で、「纏蓋無き開いた心によって、心に光輝をさせる」とは近行定を得て似相が現れる段階と考えられる。この点を見れば、光明想と光明遍は同様な修行法と判断できる。

さらに、光明想の功德は以下のような説明文が Nikāya 時代の經典にも多数見出せる。

Thinamiddham pahāya vigata-thina-middho viharati, ālokasaññī sato sampajāno thina-middhācittaṃ parisodheti.⁽²³⁾

昏沈と睡眠とを捨てて、昏沈と睡眠との離脱に住し、光明想を正念正智にする者は昏沈と睡眠から〔離れて〕心を浄化する。

Vim. も Vis. でも光明遍には同様な功德があるとされる。

- 1) Vim.⁽²⁴⁾における光明一切入の功德は「一切入において心に随う。淨解脱を得る。懈怠と眠を伏し。闇を除く。明かりを作す。天眼を起こし得る。光明一切入を修す。処々光明を見る。余りの功德は地一切入に説く所の如し」と説かれている。
- 2) Vis. の第 5 品⁽²⁵⁾には Vim. のように光明遍によって以下のような力（功德）が得られることが説かれている。

āloka-kasiṇavasena sappabhānīpanimmānaṃ thīnamiddhassa dūrabhāvakaranam andhakāra-vidhamanaṃ dibbena cakkhunā nīpadassanattamaṃ āloka-karanam ti evaṃ ādīnījjhanti.

光明遍によって、輝く色の化作すること、惛沈・睡眠を遠ざけること、暗黒を除滅することと天眼を以って、見るために、光明を作ること、このようなことが出来る。

- 3) Vim. と Vis. 以外の他の注釈書は光明想の修行法が Nikāya 時代と同様で、惛沈と睡眠とより離れて心を浄化するのが共通点である。又、天眼智に関して、光明想によって天眼を生じる事も説かれている。さらに PtsA.⁽²⁶⁾において、天眼に関する修行法があり、長文なので要約すると「光明想を行うことに対する解釈は光明を増大して、天眼を生じ、それが光明遍の第四禪によって生じたものである」となる。一方、光明遍は Vis. を引用して、同様な内容が書かれている。修習で獲得できる功德にも光明想と光明遍は同様であることが分かる。

一方光明遍満に関しては Nikāya と経論の時代は五正定支⁽²⁷⁾ (pañcaṅgiko sammāsamādhī) の一つとして光明遍満が説かれている⁽²⁸⁾が、その特徴や修行法などは説かれていない。論の時代に光明遍満⁽²⁹⁾は「天眼が光明遍満なり」又、論と注釈書との中間時代の Net. においては「光明遍満が観である」⁽³⁰⁾という説明が加えられる。注釈書と復注釈書時代も論の時代と同様である。光明遍満に関わる資料が少ないために光明遍満が、如何なる

修行法であるかの説明は他の資料を加える必要がある。

注釈書の時代の後に光明遍満のかわりに「光明を増大する (ālokaṃ vaddheti)」と「光明を把持する (ālokaṃ pariggaheti)」と言う語が多数見出されている。この語は Vis. のタイ語訳⁽³¹⁾には「光明遍を作す」と訳されている。Vis. と他の注釈書もこれによって、天眼に関わることが分かる。

5. 光明遍が挿入された理由

以上の光明の修行の展開を見れば、光明の修行は天眼に関わることが分かる。又、Vim. によれば「九行処は神通の縁為り、〔二の〕無色一切入を除き、八の一切入、及び分別虚空一切入為り。余りの三十行は、神通の縁を成ぜず。」と説かれている。それと同様に、Vis. も「十遍とも諸神通の〔縁となる〕」と見出せる。それによって十遍が神通に関わりの深い修行法であることがよく分かり、光明遍は神通力を得られるのために、十遍に挿入されたと考えられる。Vim. も Vis. も五神通（神變通・天耳通・他心智通・宿住随念智通・死生智通）の修行法が説かれているが、各々の遍によって、得られる神通力が異なる。特に他心智通・死生智通を獲得するには光明の修行をする必要がある。その事に関して Vim. と Vis. の神通の修行は以下のである。

① Vim.⁽³²⁾ :

●他心智：修行者は光一切入を修習し、第四禪の自在を得て、先ず自分の心に光を以て身を満たす。天眼を以て、自らの心意色の変化の一切を知るように修習する。次に他人の身にも光を満して、他人の心意識の変化を分別して観る。他心智を起こし、心事を取る。

●死生智：修行者は光明を色の九一切入の何れかと起こし、又は光明一切入を起こし、清白の不動な光一切入（似相）に至る。第四禪に入り光明想を作意し受持する。光明を以て内に満たして色形を作意する。つまり智を以て内に光明の色を見ることを天眼と言う。天眼を以て一切の衆生を見る。

② Vis.⁽³³⁾ :

●他心智通 (cetopariyāṇāna) は光明を増大し天眼を以て他人の心の付

近に存在する血液の色を見ることによってその欲・色・無色界の諸有情の心を知る。

●死生智通 (cutūpapātāñāṇa: 天眼とも言う) 光明の把持によって、修して常人を超えた清浄な天眼が生じる。天眼を以って、有情の死・再生するに、その業に随って何の界に生まれるなどを見ることができる。

他心智通と死生智通には天眼を修習するために、Vim. では光一切入が必要であると説かれている。それが、光明を他の九の色一切入の第四禪を自在に修習するか、光明一切入を第四禪の自在の修習によって、生じるものである。つまり、第四禪に光明一切入の自在を修習すると考えられる。一方 Vis. も光明を把持によって、天眼が生じる。さらに天眼を持って見るのに、そのところに光明を増大する修習をしなければならない。つまり、光明遍を修習することと考えられる。

ところで、VisT. では「十力 (釈尊) が十遍処を説かれているが、パーリ⁽³⁴⁾ (三蔵) では、色遍の所縁が八つ (八遍) の形にある (まとまる)。(釈尊の) 説法では、白遍の (説法の) 中で光明遍が、空遍の (説法の) 中で限定虚空遍が説かれた。」と説かれている。

又、Vis. も他の注釈書にも火遍の第四禪も白遍の第四禪も光明を作すことができるが、火遍・白遍より光明遍の方が優れたものであると説かれている。この点に関して、その火遍・白遍の要素に光明があるが、結局 Vim. と同様に、火遍・白遍から得た光明をさらに、修習しなければならないのである。つまり、最後に光明遍に切り替えて修習するのである。

MN.⁽³⁵⁾によれば、世尊が阿那律に「もし我が少三昧の時に我に少眼があり、故に我は少光明を想念して、少色を見る。而も、もし我が不少三昧の時に我に無量眼があり、故に我は無量の光明を想念して、無量の色を見る。」と説かれたように「光明の修行」が、「色を見る」に関連することが分かる。

上記のように五神通の中の他心智通と死生智通を獲得するためには、光明の修行が必要である。そのために、Vim. も Vis. も光明遍を挿入したとしか考えられない。

また、Vis.⁽³⁶⁾が「心一境性が定である」と説かれているように「光明想」も「光明遍満」も「光明を増大する」も「光明を把持する」も同じように光明を所縁 (ārammaṇa) として修習する修行法であること、又、天眼が獲得できる修行法を見れば、光明遍と同一な修行法になる。

6. 結 論

- 1) 光明に関わる修行法は注釈書時代以前に光明遍という修行法がないが、光明想と光明遍満という修行法として見出せる。注釈書時代から、「光明を増大する」と「光明を把持する」とは光明遍と同一な修行法である。
- 2) 「3. 光明遍の歴史的経緯」のように漢訳文献の Vim. に光明一切入として見出だされているが、パーリ語文献における初出は Vis. であるが、他の注釈書は十遍処としての光明遍はないが、その後の時代は Vis. を引き続き光明遍が十遍の中の修行法として伝えられて来た。
- 3) Vim. と Vis. が光明遍を十遍に挿入した理由は、他心智通と死生智通を得るための修行法としたためである。
- 4) Abhs. は光明遍と虚空遍の順序を入れ替えて、光明遍を最後に持ってきたのは、光明遍を修習して天眼智に関連することと天眼によって漏尽通につながる事が出来る。いわば最高の智慧に近いものであって、これが虚空遍の後にあるのでは落ち着きが悪いという判断がなされたものと思われる。

略号と使用テキスト

- DN. : *Dīgha Nikāya*, ed. T. W. Rhys Davids and J. E. Carpenter, PTS, London, 1975–1982.
 MN. : *Majjhima Nikāya*, ed. V. Trenckner and R. Chalmers and C. A. F. Rhys Davids, 4vols. PTS, London, 1948–1951.
 AN. : *Aṅguttara Nikāya*, ed. M. Walleiser and H. Kopp, PTS, London, 1924–1957.
 J. : *Jātaka*, ed. V. Fausbøll, PTS, London, 1962–1964.
 MNd. : *Mahāniddeśa*, ed. L. de La Vallée Poussin and E. J. Thomas, PTS, London, 1978.
 Pṭs. : *Paṭisambhidāmagga*, ed. Arnold C. Taylor, PTS, London, 1979.
 Dhs. : *Dhammasaṅgaṇī*, ed. E. Muller, PTS, London, 1978.
 Vibh. : *Vibhaṅga*, ed. C. A. F. Rhys Davids, PTS, London, 1978.

- Kv. : *Kathāvatthu*, ed. A. C. Taylor, PTS, London, 1979.
- Net. : *Nettipakaraṇa*, ed. E. Hardy, PTS, London, 1902.
- Vis. : *The Visuddhimagga of Buddhaghosa*, ed. C. A. F. Rhys Davids, PTS, London, 1975.
Visuddhimagga of Buddhagosācariya, ed. H. C. Warren (Dharmananda Kosambi, Revised), Vol. 41, HOS, Massachusetts, 1950.
- VisT : *Paramatthamañjūsā Visuddhimaggamahāṭīkā* (Pāli-Thai), 4parts Bhumibalo bhikkhu Foundation Bangkok, 1993–1995.
- DA. : *Dīgha Nikāya Atthakathā (Sumanāgalavilāsini)*, ed. W. Stede, 3vols. PTS, London, 1968–1971.
- PṭsA. : *Saddhammappakāsinī: commentary on Paṭisambhidāmagga Atthakathā*, ed. C. V. Joshi, 3vols. PTS, London, I, 1933 · II, 1940 · III, 1947.
- Vim. : 『解脱道論』 (*Vimuttimagga*) 大正新脩大藏經 No. 1648.
- Abhs. : *Abhidhammatthasaṅgaho*, ed. Pali text of Chattha Saṅgayaṇa, Igatapuri, 1998.

注

- (1) 業処説についての従来の研究の重要なものとして次の諸論がある。P. V. Bapat: *Vimuttimagga and Visuddhimagga* (Poona, 1937) pp. 38–85; P. V. Bapat and R. D. Vadekar, ed: *Atthasālinī* (Poona, 1942) p. xxxviii, 増永靈鳳『禅定思想史』(日本評論社, 1944年) pp. 83–103, 同「四十業処について」(『日本仏教学会年報』第23号, 1958年) pp. 227–242, 佐々木現順『仏教心理学の研究』(日本学術振興会, 1960年) pp. 82–83, 水野弘元『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』(山喜房佛書林, 1964年) pp. 919–926. 森祖道「業処説の種々相」(『田村芳朗博士還暦記念論集 仏教教理の研究』春秋社, 1982年) pp. 127–140. Ratana, Gyana Thera (ed.): *The Way of Practicing Meditation in Theravāda Buddhism*, Tokyo, 2001.
- (2) Vim. と VA., SA., VibhA., SnA., DhsA. は三十八業処(行処となる)が見出される。
- (3) Vim. においては三角形も四角形も出来るが, 円形のほうが優れたものと説かれている。
- (4) 諸蓋とは五蓋であり, または心を覆う五種の煩惱を言う。即ち, 貪欲蓋 (kāmacchandanivaraṇa), 瞋恚蓋 (vyāpāda nīvaraṇa) 昏沈睡眠蓋 (thīnamiddanīvaraṇa), 掉挙悪作蓋 (uddhacca-kukkuccanīvaraṇa), 疑蓋 (vicikicchānīvaraṇa) の五つを言う。
- (5) 転向・入定・在定・出定・観察である。『南伝』第62巻, pp. 306–308を参照。
- (6) 水野弘元『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』(山喜房佛書林, 1964年) pp. 17–40。
- (7) DN. I-3, III-268, 290; MN. II-14f.; AN. I-41f., V-45–47, 60.; J. I-303.

- (8) MNd. p. 143; Pts. p. 6, 28, 95, 136.
- (9) Pts. p. 49. 但し, p. 143f. においては種々の遍の名を挙げて, 八に数える部分もある。
- (10) Dhs. p. 42.
- (11) Kv. p. 197f., 200f.
- (12) Net. p. 89.
- (13) 十一切入・十不浄想・十念・四無量心・観四大・食不浄想・無所有処・非非想処である。
- (14) 大正三十二卷, p. 411.
- (15) 同書, pp. 418-424.
- (16) 空処は空無辺処であり, 識処は識無辺処である。
- (17) 空処と識処と記している所もありながら, 四無色に摂る行処の答えは空一切入・識一切・無処有処・非非想処のような二無色一切入としても記している。
- (18) Vim. は業処の代わりに行処と漢訳している。
- (19) Abhs. p. 62.
- (20) AN. III-323 (南伝20, p. 60).
- (21) Pts. p. 97f. ālokasaññāvasena cittas 'ekaggatā avikkhepo samadhabalaṃ
- (22) ibid. p. 114f.
- (23) DN. I-71 (南伝6, p. 107).
- (24) 大正三十二卷, p. 423f.
- (25) Vis. (PTS 版, p. 176, HOS 版, p. 129) (南伝62, p. 349)
- (26) PtsA. I-376f.
- (27) 五正定支は喜遍満 (pīti pharaṇatā), 楽遍満 (sukha pharaṇatā), 心遍満 (ceto pharaṇatā), 光明遍満, 相観察 (paccavekkhana-nimittam) である。
- (28) DN. III-277f.
- (29) Vibh. p. 334.
- (30) Net. p. 89.
- (31) Mahmakut Buddhist University (tr): *Visuddhimagga*, 3parts. in 6Vols., Bangkok, 1955 (5th edition)
Bhumibalo Bhikkhu Foundation (tr): *Visuddhimagga*, 3parts. in 6Vols., Bangkok, 1994-1955.
- (32) 大正三十二卷, pp. 441-445.
- (33) Vis. (PTS 版, pp. 409-423, HOS 版, pp. 344-357) (南伝63, pp. 373-398)
- (34) Pts. p. 49.
- (35) MN. III-161f.
- (36) Vis. (PTS 版, p. 84, HOS 版, p. 68) (南伝63, p. 172)

図A：遍処の時代表

Nikāya	経と論との中間時代		阿毘達磨	論と注釈書		
十遍	十遍	八定	八遍	十遍	止	観
地遍	地遍	地遍	地遍	地遍	地遍	—
水遍	水遍	水遍	水遍	水遍	水遍	—
火遍	火遍	火遍	火遍	火遍	火遍	—
風遍	風遍	風遍	風遍	風遍	風遍	—
青遍	青遍	青遍	青遍	青遍	青遍	—
黄遍	黄遍	黄遍	黄遍	黄遍	黄遍	—
赤遍	赤遍	赤遍	赤遍	赤遍	赤遍	—
白遍	白遍	白遍	白遍	白遍	白遍	—
—	—			—	—	—
空遍	空遍			空遍	空遍	
識遍	識遍			識遍		

注釈書						復注釈書	
Vimuttimaggā				Visuddhimaggā	他の注釈	Abhs	他の復注釈
十一一切入	色一切入	無色一切入	十一一切入解釈	十遍	十遍	十遍	十遍
地一切入	地一切入	—	地一切入	地遍	地遍	地遍	地遍
水一切入	水一切入	—	水一切入	水遍	水遍	水遍	水遍
火一切入	火一切入	—	火一切入	火遍	火遍	火遍	火遍
風一切入	風一切入	—	風一切入	風遍	風遍	風遍	風遍
青一切入	青一切入	—	青一切入	青遍	青遍	青遍	青遍
黄一切入	黄一切入	—	黄一切入	黄遍	黄遍	黄遍	黄遍
赤一切入	赤一切入	—	赤一切入	赤遍	赤遍	赤遍	赤遍
白一切入	白一切入	—	白一切入	白遍	白遍	白遍	白遍
—	—	—	光明一切入	光明遍	—	限定虚空遍	光明遍
空一切入	分別虚空一切入	—	空一切入	限定虚空遍	空遍	光明遍	限定虚空遍
		無辺虚空定	離色空				
識一切入		無辺識定	識一切入		識遍		

光明遍

四無色
空無辺処
識無辺処
無所有処
悲想非非想処